



岡山県立
邑久高校

協同学習

◎岡山県邑久実科高等女学校として開校。2006年度に単位制に移行。10年度に協同学習を導入、県教育庁指導課主管の「高等学校教科指導パワーアップ事業」研究指定校に選ばれた。施設訪問や地域イベントへの参加などボランティア活動にも力を入れる。

設立	1921(大正10)年
形態	全日制・単位制／普通科／共学
生徒数	1学年約160人
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、岡山大、長崎大、岡山県立大などに計7人が合格。私立大は、近畿大、神戸学院大、岡山理科大、就実大などに延べ87人が合格。短大には10人、専門学校には60人が合格。
住所	〒701-4221 岡山県瀬戸内市邑久町尾張404
電話	0869-22-0017
Web Site	http://www.oku.okayama-c.ed.jp/oku.htm

「学び合い」が 生徒の意欲を引き出し 授業を活性化させる

変革のステップ

背景

◎授業態度は真面目だが、成績が伸びない生徒が多い。他校の取り組みから生徒の協同学習に可能性を見いだす

STEP 1

実践

◎有志の教師で学び合いを実践、他校視察や公開授業を通して浸透させ、2010年度に全校で導入

STEP 2

成果

◎教師の生徒理解が進み、授業に積極的に取り組む生徒が増えた

STEP 3

ただノートを取るだけの生徒に
一斉授業の限界を感じる

2006年度に岡山県立邑久高校に赴任した教務課主任の杉山義則先生は、定期考査を採点しながら違和感を感じていた。生徒は落ち着いて授業を聞き、きちんとノートも取っている。毎回宿題も提出する。しかし、テストの結果はそうした生徒の態度とはかけ離れたものだったからだ。生徒は授業を聞いているように見えるだけで、内容はほとんど頭に入っていないのではないかと。その感触は、定期考査を重ねるごとに確信に変わっていった。

「生徒の授業態度は真面目で、他校の生徒と変わらないと感じていましたが、授業を聞いていくように、実はうわの空。ノートを取り、宿題は出しても、結局、授業の内容は定着していなかったのです。しかも、そうした生徒は1人や2人ではありませんでした」

08年度に赴任した荒金徹先生も、同じような課題を感じていた。

「本校の生徒は、素直で純朴な半面、受け身で指示待ちタイプ。教師の投げ掛けに対しても、生徒はただノートを取るだけで、学力として身に付いてはいませんでした。自分の授業スタイルに限界を感じ始めていました」
これまでの一斉授業だけでは、生徒の力を伸ばし切るのは難しい。有効な打開策はないか。



荒金 徹 Arakane Torn
岡山県立邑久高校

教職歴18年。同校に赴任して3年目。2学年主任。「生徒には常に『限界突破』を心掛けてほしい」



杉山義則 Sugiyama Yoshinori
岡山県立邑久高校

教職歴26年。同校に赴任して5年目。教務課主任。「教師は学びのコーディネーターであるべき」



姫路真由美 Himeji Mayumi
岡山県立邑久高校

教職歴26年。同校に赴任して6年目。進路指導課主任。「やればよかったと悔やむことのないよう常に挑戦する意欲を持ってほしい」



岡野貴司 Okano Takashi
岡山県立邑久高校校長

教職歴35年。同校に赴任して2年目。「自信と活力を備えた生徒を育成したい」

杉山先生が生徒に合った指導スタイルを模索していた時に目にとまったのが、本誌08年9月号の広島県立安西^{やすし}高校の記事だった。「学び合い」を軸にした授業により、学校再生、生徒の学習意欲の向上を果たした事例である。

08年12月に安西高校で公開授業が実施されたため、杉山先生は同僚2人と訪れた。そこで目にしたのは、授業で生き生きと活動する生徒の姿だった。授業に無関心な生徒は一人もいなかったのだ。

有志の教師で 独自に学び合いを導入

学び合いの効果を実感し、すぐにでも自校で実践したいと考えたものの、報告だけで他の教師の賛同を得るのは難しかった。そこで、3人の教師は、まず自分たちの授業で学び合いを取り入れることから始めた。その一人、進路指導課主任の姫路真由美先生は次のように話す。

「他校の指導例や専門書を参考に、担当科目の現代文で実践してみたところ、すぐに効果を実感できました。いつもなら居眠りをしてがちな5限目の授業でも、生徒は投げ掛けた課題について活発に話し合っていました」

折しも、09年度に赴任した岡野貴司校長の下、教務課、進路指導課、学年主任で構成する「学力向上プロジェクト」が立ち上がった。校内に学び合いを広める契機になると考えた杉山先生たちは、プロジェクトの検討課題の一つに「協同学習」を据え、他の教師と共に先進校の訪問を繰り返した。すると、次第に学校全体に学び合いへの理解が浸透し、09年7月には1年生の全授業で導入が決まった。当時、1学年主任だった荒金先生は次のように振り返る。

「学び合いの趣旨には賛同できるものの、学力が下がったり、進度が落ちたりしないか心配で、最初は導入をためらいました。しかし、同じ数学で既に学び合いを取り入れてい

た杉山先生のクラスと、一斉授業を続けている私のクラスを比べてみると、進度はほとんど変わりませんでした。また、杉山先生の授業の評判を聞いた私のクラスの生徒から『杉山先生の授業でしている学び合いを、先生の授業ではされないのですか』と質問されることもあり、思い切って始めました」

校内向け公開授業で 学び合いの理念や方法を共有

09年11月、杉山先生と姫路先生は学び合いを取り入れた校内公開授業を実施した。

「まずは授業を見て、自分にも出来ると感じてもらえればと考えました。公開授業という、指導案をしっかりと練り、完璧な授業をしようとする先生が多いのですが、それでは敷居を高くするだけです。我々が普段行っている授業を見てもらい、先生方が抵抗感を抱かないよう配慮しました」(杉山先生)

こうした過程を経て、10年度には全校で学び合いを導入することが、12月の職員会議で決まった。県内には一部の授業で取り入れている高校はあったものの、全校で導入したのは同校が初めてだった。決断を下した岡野校長は、その思いを次のように語る。

「今までの勤務校での経験から、一斉授業には限界を感じていました。また、前任校は

SELHiの指定校で、ペアワークやグループワークで成果を上げていました。これらのことから、学力に幅がある中ですべての生徒の力を伸ばすには、生徒が主体的に活動できる場面を多く設ける必要

があると考えていたのです。そうした私の思いと、杉山先生や姫路先生の目指す方向性が一致したことは幸運でした」

上意下達ではなく、現場の教師から取り組みが始まり、校長が支援する形で全校一斉導入されたことが、スムーズな浸透につながったのだ。

形よりも理念を共有し 取り入れ方は個々の教師に任せる

10年4月、「協同学習」の研究を進める中京大の杉江修治教授を講師に招き、理論の概要と授業の進め方について指導を受けた。杉江教授が提唱する学び合い(図1)は、生徒同士が学び合うことで学習への動機付けを図ると共に、生徒のコミュニケーション能力の向上、スムーズな学級運営を目指すものである。

大まかな流れは次の通り。①授業の狙いや課

図1 グループ活動の進め方の工夫

- ①課題(学びのゴール)の明確化
個人、グループ、クラスの課題をそれぞれ設定する
- ②生徒が個別に考える時間をとる
考えるための資料の提供、考えられない生徒の支援
- ③話し合いを促す手順を指示
個人の発表の仕方、グループ内における意見集約の仕方など
- ④グループ内の役割を指定
グループ全員に役割(司会、記録、発表など)を与え、責任を持たせる
- ⑤適切なグループを編成する
人数は4~6人、異質性を持たせるため、基本は男女混成
- ⑥教師が学習集団のイメージを持つ
単なる仲よし集団ではなく、課題解決志向型の集団づくり
- ⑦学び合いを振り返る機会を持つ
自分の変化に仲間がどのように貢献したのかを振り返らせる
- ⑧学びの値打ちを伝える
主体的な学びを体験させ、学習意義を伝える

グループ学習=協同学習ではないが、主体的、自律的な学習場面としてグループ学習を導入する、としている

*中京大杉江教授の資料を基に編集部で作成

題を説明し、②生徒が一人で考える時間をとり、最大の特徴は、授業の方法を固定化していないことだ。数学で演習やテストの振り返りに取り組ませたり、国語で著者の意図を考えさせたりといった場面では、グループで学び合いを行う。しかし、すべての授業で学び合いを行う必要はなく、新しい概念を教える時など、一斉授業が効果的な場合は、1時間、講義に充てられることもある。グループになった時の男女の比率や配置も、教師個々の判断に委ねている。

「5分、10分でもいいので、生徒が互いに力を引き出す場面をつくるのが、学び合いの要です。それさえ学校全体で共有できているれば、形にこだわらなくてもよいというのが本校の考えです。先生方に抵抗なく受け入れられたのも、授業スタイルを固定させず、教師の判断で自由に授業を組み立てられる柔軟

性を持たせたからだと思っています」(岡野校長)

生徒に役割を持たせ 学び合いを活発化

学び合いは、教わる生徒・教える生徒の双方に利点がある。授業を理解していない生徒は、授業中でも他の生徒に質問できる。教える側も、自分の言葉で説明することによって理解が深まり、実は理解の浅かった部分が明確になる。また、教科学力の定着だけでなく、社会で生きる力を付けることにもつながる。

「勉強が出来る人に学び合いは損」と言う生徒もいます。しかし、社会に出ればチームで仕事をすることがほとんどです。出来る人が出来ない人を助ける場面はいくらでもあり、そのたびに不満を抱いていたのでは仕事は出来ません。協同学習を通して、学力の定着だけでなく、コミュニケーションの大切さを知り、さまざまな考えを持つ人がいることを実感してほしいと思います」(杉山先生)

それだけに、学び合いの活性化は、教師の工夫のしどころである。例えば、グループで演習問題に取り組ませる際、必ずグループ全員が理解できるまで教え合うよう指示し、理解できたところ、出来なかったところを明確にさせる。更に、このプロセスを教師が指示するのではなく、各グループの代表者1人に委ね、口頭で

図2 課題プリント例 (数学)

数学Ⅱ <『指数関数』復習テスト> 角軍 先生
 [問題] 次の問いに答えよ。

(1) 次の方程式・不等式を解け。

① $(\frac{1}{8})^x = 16^{-2x+1}$ ② $9^{-x+1} = (\frac{1}{\sqrt{27}})^x$ ③ $(\frac{1}{4})^{x-1} \leq \frac{1}{2}$

① $x=2$ ② $x=4$ ③ $x \geq 2$

(2) 次の計算をせよ。

① $2\log_3 \frac{2}{3} + \log_3 \frac{4}{5} - 2\log_3 \frac{4}{3}$ ② $(\log_3 4 + \log_3 4)(\log_3 27 - \log_3 9)$

① -1 ② 6

(3) 次の方程式を解け。 $9^x + 3^{x+1} - 18 = 0$

① $x=1$

★早くできた班は、次の問題を班で考えてみましょう。
 次の方程式を解け。 $9^x - 3^{x+1} - 18 = 0$

■各班の第2象限の人が他の班員に伝える内容 ■ ※「これ、読んでやってください」はダメ!

(1) 各自でテストの振り返りをする → 上の解答を参考にする

(2) 解答できなかった問題は、班の中で教え合っ
て班員全員が理解できるように努める。
→ 班で解決できなかった問題があれば、第1象限の人は前のホワイトボードに貼っている【解答・解説】を調べて、班の人に伝えること。

(3) どが理解できていなかったのか、なぜできなかったのかを意見交換して、班で出した意見をまとめる。(まとめ役は、第4象限の人)
→ 各自、下の枠に自分ができなかった理由を書くこと。
→ きちんと発表ができるようにまとめること。

(4) 第3象限の人は、(3)でまとめた意見を発表する。

発表までの制限時間は15分間です。

◎がうしろで間違えたかできなかったの振り返り
 (例) ○○のところからなかった
 ・解題が足りなかった
 ・○○のところを忘れていた

荒金先生の課題プリント。前時のテストの復習をグループで行うため、問題文の下に「まとめ役」の生徒への具体的な指示があり、メンバーに口頭で伝えるよう徹底している

*学校資料をそのまま掲載

先生) 10年度は全教師の授業を撮影し、授業力の向上に生かす取り組みも始めた。「自分の授業を客観的に見ると、いか自分が話しすぎていたかがよく分かりました。不要な説明を減らし、その分、生徒の意欲を引き出

教師の生徒理解が促進し 授業改善への意識も高まる

学び合いの導入により、授業に対する教師の

他のメンバーに伝えさせる場合もある(図2)。役割を明確にして責任を持たせ、グループ間の質問や意見交換を活発にさせる工夫である。小テストも方法次第で、協同学習を活発化するツールになる。グループ全員が満点だったらボーナスとして更に1点を与えるとすると、すると、生徒は「みんなで満点を取ってボーナス点をもらおう」「1人だけ出来なければみんなに迷惑がかかる」と考え、自ずと学び合いにも熱が入るといわけだ。

意識は大きく変わった。

「グループ活動では教師の発問が重要です。曖昧な指示は生徒を混乱させます。一斉授業では生徒への質問をその場で考えることが多かったのですが、グループ活動では何をどのようなタイミングで取り組ませるのか、どのような発問をするのかを事前に考えてから授業に臨むようになりました」(杉山先生)

「生徒が活動する場面が多いため、生徒個々の理解度や、生徒の人間関係が手に取るように分かるようになりました。生徒がうまく動かない時は、発問の仕方や演習の取り組ませ方を工夫するというように、授業改善に向けた課題も明確になりました。試行錯誤を繰り返しながら、授業の質を高めていきたいと思っています」(荒金先生)

すような活動を取り入れるように心掛けています」(姫路先生)

以前に比べ、生徒や授業に関して教師同士でよく話すようになったのも一つの変化だ。

「生徒を伸ばしたい、良い授業をしたいという先生方の意欲が高まっていることを感じます」(岡野校長)

授業に対する生徒のかわり方も大きく変わった。私語や居眠りをする生徒がほとんどいなくなっただけでなく、積極的に授業にかかわろうとする生徒が増えたという。

「何よりもうれしいのは『考えたり話したりしないといけないので疲れる』という生徒の声を聞くことです。『疲れる』とは、授業中に生徒が頭を使っているということなんです。

『先生の質問に対して考えるようになった』という声も多く、積極的に授業に参加しようとする生徒が増えていることを実感しています」(姫路先生)

今後の課題は、コミュニケーション力やプレゼンテーション力など、学力以外の成果も客観的に測ることだ。専門家の指導の下、生徒の意識調査を行い、学び合いの浸透度、学習集団としての成熟度を測定する予定だ。また、学び合いは不要と考えている生徒に対して、どのように意識付けを行うかも課題だ。すべての生徒が成長できたと実感できるよう、同校は不断の改善を進めていく考えだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2008年9月号特集「広島県立安西高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)